壊れない日常、届かなくなる距離

― 鍵を預けた夫・第0話〜第4話 ―

鍵山静夫（鍵穴文庫）

第0話「基準点」

2019年の秋だった。

俺は26歳。彼女は33歳で、すでに5歳前後の連れ子を一人で育てていた。共通の知人の紹介で近所のカフェで会った。彼女は落ち着いていて、会話のテンポがゆっくりだった。恋愛に積極的な感じはせず、「今は子供優先だから」と何度も口にしていた。俺も年上の女性と本格的に付き合う経験は少なく、最初はお互いに距離を測り合っていた。

それでも、会う頻度は少しずつ増えていった。子供を保育園に預けた昼間に、短い時間だけ会う。最初は仕事や子供の話ばかりだったが、徐々に昔の話や学生時代の話が混ざるようになった。彼女は笑うと目が細くなり、声が少し甘くなった。その声を聞いていると、なぜか安心した。

付き合い始めてしばらくして、初めて体を重ねた。

彼女の家で、子供が寝たあとの夜だった。緊張はしていたが、焦りはなかった。服を脱がせ合う動作も慎重で、彼女はコンドームを自分で取り出した。挿入した瞬間、俺はそれまでにない感触を感じた。彼女の中は熱くて、柔らかくて、これまでの相手とは明らかに違っていた。快感が徐々に高まっていくのを、はっきりと自覚した。

ただ、俺はそれまでどの相手とも中でイッたことがなかった。感度が落ちてしまうことがほとんどだった。その夜も最初は同じだった。しばらく動かしたあと一度抜いて、自分で射精直前まで持っていき、イク瞬間に挿入して中で出した。彼女は驚いた顔をしていたが、嫌な顔はしなかった。

「……初めて、気持ちいいかも」と彼女は小さく言った。声は少し上ずっていて、可愛かった。

それから何度か重ねるうちに、俺は徐々に挿入したままイけるようになっていった。彼女の中の感触が、俺の体を変えていくようだった。彼女の方も「自分はセックスでイケるタイプじゃない」とずっと思い込んでいたらしく、最初の頃はあまり反応を見せなかった。でもある夜、彼女が上に乗った。前後に腰を動かし、クリトリスを擦りつけるようにしているうちに、息が少し乱れ始めた。

「……あ」と、彼女が小さく声を出した。いつもより少し高い声だった。恥ずかしそうに唇を噛みながら、それでも腰の動きを止めなかった。やがて体が小さく震え、俺の上で力を抜いた。

「……これ、初めて」と彼女は息を整えながら言った。声は甘くて、少し掠れていて、とても可愛かった。

俺のものが歴代で一番長く、奥まで届くのも、彼女には印象的だったらしい。極端に深い体位のときには「痛い」と小さく呟くこともあったが、普段はむしろ「届く感じがいい」と言ってい

た。お互いが「この人とじゃなきゃ無理だった」という感覚を持ったことが、関係を深くした。

結婚したのは2021年。

それから現在まで。連れ子は12歳になり、二人の間に4歳の女の子と2歳の男の子が生まれた。日常は子供中心で回っている。朝は弁当を作り、夜は寝かしつけ。セックスの頻度は子供が生まれてから減っていたが、時々彼女が上に乗って、前後に腰を動かしながらクリトリスを擦ってイク夜がある。喘ぎ声はいつも可愛くて、少し高くて、恥ずかしそうに抑えようとする。それが、俺たちの型だった。

ただ、俺はここ数年、徐々にNTRの妄想に惹かれていっていた。

彼女が他の男に抱かれているところを想像すると、強く興奮する。家族としてうまくやっている日常があるのに、夜になるとそんな妄想をしてしまう自分がいた。最初はただの空想だと思っていた。でも回数を重ねるうちに、妄想は少しずつ具体的になっていった。彼女の可愛い喘ぎ声が、別の男の前でどう変わるのか。奥まで届くはずの俺のものが、彼女の中でどう感じられるのか。そんなことを考えてしまう自分が、嫌だった。

ある夜、子供たちが寝静まったあと。

リビングのソファで、俺はスマホをいじっていた。彼女は隣でテレビを見ている。いつもの光景だ。俺はうっかり、ブラウザの

履歴を消し忘れていた。NTR系の成人向けコンテンツのタイトルが、画面に残っていた。

彼女が横目で見た。

「……なに、それ」

声は低くて、呆れたような響きがあった。俺は慌てて画面を消したが、遅かった。

「見てたの？」

彼女はスマホを置いて、俺の顔を見た。目は細くなっていて、いつもより少し冷たい。

「家族いるのに、そんなの見てるの？　普通じゃないよ」

俺は何も言えなかった。沈黙が続く。彼女は視線をテレビに戻して、ぽつりと言った。

「……なんで、そんなの見てるの」

俺は正直に話すしかなかった。

「……お前が、他の男に抱かれてるところを想像すると、興奮するんだ。最近、特に」

彼女は一瞬、顔をしかめた。声は、いつもより少し硬かった。

「……嫌い。そういうの、苦手だって言ってるでしょ。普通じゃないし」

「わかってる。でも……」

彼女は小さく息を吐いた。完全に拒絶する言葉ではなかった。ただ、はっきりと嫌な顔をしていた。

「考えてみなくもない、とか、そういう話じゃないよ。本気でやろうとか、絶対にないから」

でも、会話はそこで終わらなかった。彼女はスマホを再び手に取りながら、少し間を置いてから言った。

「……ただの空想なら、いいけど。現実にやるとか、そういうのは無理」

声は相変わらず柔らかくはなかったが、扉を完全に閉めた感じでもなかった。その曖昧さが、俺の中で少しずつ大きくなっていく。

彼女はテレビの方を向いたまま、これ以上何も言わなかった。俺も黙って、彼女の横顔を見つめていた。

日常は、まだ何も変わっていない。子供たちのおもちゃが床に散らばり、彼女のエプロンがキッチンにかかっている。喘ぎ声は可愛いままで、騎乗位で彼女が上に乗る夜もある。

でも、俺の中では、すでに少しだけ何かが動き始めていた。

第1話「日常の隙間」

子供たちが寝静まったあと、リビングのソファに二人で座っていた。

4歳の娘が昼間に描いたクレヨンの絵がテーブルに置いてあり、2歳の息子のおもちゃが床に散らばっている。12歳になった連れ子の教科書がリビングの隅に積んである。いつもの光景だ。彼女は足を組んで、スマホをいじりながらたまに小さく笑っている。その横顔を見ていると、ふと、ずっと胸の奥にあった話をまた持ち出したくなった。

履歴を見られたあの夜から、何日か経っていた。

あれ以来、彼女はその話を二度としなかった。俺も切り出せずにいた。朝は弁当、夜は寝かしつけ。彼女が上に乗る夜もあったし、喘ぎ声は可愛いままだった。日常は元通りに戻ったはずだった。

でも、最後に彼女が言った一言だけが、俺の中で残り続けていた。

「ただの空想なら、いいけど」

現実にやるのは無理。本気でやろうとか、絶対にない。そう言いながら、彼女は扉を完全には閉めなかった。その曖昧さが日を追うごとに、俺の中で大きくなっていった。

そして、今夜。

「ねえ、前にちょっと話したこと、覚えてる？」

彼女はスマホから顔を上げて、少し眉を寄せた。

「……あの、変な話？」

「うん」

沈黙が少し続く。彼女は視線をテレビに戻して、ぽつりと言った。

「苦手だって言ったよね。普通じゃないし」

「わかってる。でも、『ただの空想ならいい』って、あのとき言ったじゃん」

彼女は小さく息を吐いた。声はいつも通り、少し甘くて柔らかい。

「……言ったけど。空想の話だよ？　現実にやるとか、そういうのは無理って言ったはず」

でも、完全に拒絶する言葉ではなかった。その温度感が、俺には引っかかった。

彼女は再びスマホを見て、画面をスクロールし続けている。その横顔は、いつもの彼女だった。

このまま何も変わらない日常が続いていくのか。それとも、少しだけ、違う方向に進むのか。

俺は黙って、彼女の横顔を見つめていた。

その夜、ベッドに入ってからも話は続いた。

子供たちの部屋のドアは閉まっている。彼女はいつものように俺の隣で横向きになり、背中を向けていた。

「本当に、ただの空想なんだからね」と彼女は言った。声は変わらず、少し甘くて柔らかい。

「わかってる」

「会うとか、そういうのまでは考えてないから。ただ……ちょっと、想像するくらいなら、いいかなって思っただけ」

俺は彼女の肩に手を置いた。彼女は拒まなかった。

「どんな人がいいと思う？」と、俺は慎重に聞いた。

彼女は少し間を置いてから答えた。

「……わかんない。普通の人？　でも、普通じゃない話なんだから、普通じゃなくてもいいのかな」

「普通じゃない人って？」

「……大きいとか、そういうの？　よくわかんない」

彼女はそこで話を切り上げるように、布団を引き上げた。

「もう寝よ。明日早いし」

でも、完全に扉を閉めた感じではなかった。その曖昧さが、俺の中で少しずつ大きくなっていく。

翌朝、いつも通りの朝だった。

彼女はキッチンで子供たちの弁当を作りながら、2歳の息子をあやしていた。12歳の連れ子はリビングで教科書を広げている。4歳の娘はテレビの前で踊っている。

「行ってらっしゃい」と彼女は俺に言った。声はいつも通りで、特別なものは何もなかった。

俺は玄関で靴を履きながら、昨夜の会話を思い出していた。彼女が、扉を完全には閉めなかったこと。「ただの空想なら」と言いながら、ベッドの中では「想像するくらいなら」と、ほんの少しだけ先に触れたこと。そして、少しだけ口にした「大きいとか、そういうの」という言葉。

日常は何も変わっていない。子供たちの声がして、彼女のエプロン姿が見えて、いつもと同じ朝の光が差し込んでいる。

でも、俺の中では、すでに少しだけ何かが動き始めていた。

——体験版はここまで——

続きの第2話〜第4話は本編に収録されています。

第2話「検索の夜」／第3話「報告のあと」／第4話「ほんのりの先」